

空間主義とフォンタナの絵画空間について

ふくやま美術館 谷藤 史彦

ルチオ・フォンタナの絵画は一般に空間主義と呼ばれる。それは、フォンタナが穴をあけた絵画や、切り裂きをいれた絵画を制作するに先立って「空間主義宣言」を発表したからであった。しかし、その宣言の内容と実際の絵画が一致しないのではとも言われている。

本発表ではフォンタナの空間主義の成立の背景と、その絵画空間、そしてその戦後美術における意義を探る。

フォンタナが空間主義を成立させた背景には2つのことがあったと考えられる。ひとつは1930年代の建築家との共同プロジェクトの体験であり、もうひとつは未来派の影響である。

建築家との共同プロジェクトとは、1936年のミラノ・トリエンナーレで建築家ジュゼッペ・パランティらと大きな建築空間に巨大な女性と馬の彫刻を設置したもの。ここで絵画や彫刻の枠を超越した建築的空間の重要性を認識した。

未来派の影響とは、とくにバウハウスとデペロが1915年に発表した『宇宙の未来主義的再現』宣言からの影響である。ここでは造形に運動や時間の観念を取り入れ、空間概念の拡大をはかること、そしてその理想像が建築的な才能で造られることを認識した。

フォンタナはその空間主義の考え方を示すものとして、「ブラック・ライト」や「ネオン」を使った作品を制作した。それは建築的な空間であり、絵画や彫刻を超える作品であった。しかし、それは数少ない試みで終わり、圧倒的な数の作品をつくったのは「空間概念」というタイトルの絵画であった。これが、穴や切り裂きの絵画で、カンヴァスに張られた白い紙の作品(1949年)からはじまった。鑿(たがね)のようなもので直径数mmから1cm程度の丸および三角の穴をあけたものであった。

フォンタナがあえて伝統的な形式である絵画にこだわったのは、絵画という形式に穴をあけ平面を突き破ることや、その空間性を超えることを強調したかったためであった。

それと同時にフォンタナが実現したのは、絵画の重要な前提条件であるイリュージョンの否定であった。クレメント・グリーンバーグによれば、絵画におけるモダニズムとは、絵画にとって副次的な文学的な物語性や彫刻的な空間性を削ぎ落とし、それ以上還元不可能な絵画の本質である平面性に至る過程であるとした。たとえばバーネット・ニューマンにおいてはイリュージョンが最小限に抑えられたが、平面性、あるいは二次元的イリュージョンが残されたという。これに対してフォンタナは、カンヴァスの穴から見える壁とイリュージョンというファクターを取り除きながらも、絵画として存在させえることを示した。ただし、フォンタナはイリュージョンの問題について無自覚に行っていたため、その表現はすぐに壁にぶつかり、次なる展開に向かうことができなかった。それがフォンタナの限界でもあった。